元気っ子　No 351 ながさわ保育園

園　長　　中　瀬　弦　偉

先日、児童発達心理学を研究されている東京大学の遠藤利彦先生の講演会「アタッチメントが拓く子どもの未来」に参加してきました。アタッチメント理論については「元気っ子」でもたびたび触れてお話をさせてもらってきましたが、講演を聴くことで、より理解が深まるとともに新しい研究により明らかになってきたことなども知識として得ることができました。

アタッチメントは日本語で「愛着」と訳されることが多いのですが、遠藤先生によると、「愛」という文字がはいっているが故に、しばしば「愛情」と勘違いされることが多いとのことでした。アタッチメントは「愛情」とは別物で、誰もが理解しやすい言葉にすると「安心感に浸ること」と説明されていました。これは非常にしっくりくる言葉だと感じます。そして、このアタッチメントこそが、乳幼児期にいかに「確実に」「安定して」経験できるか（単なるスキンシップとは異なり、手段はどうあれ「安心感」を与え、支えること）が、その子の生涯に亘る心身の健康な発達のカギになるということが多くの研究などから分かってきたそうです。このことは子ども家庭庁のホームページでも「はじめの１００ヶ月の育ちビジョン」として紹介されていますので、関心のある方はそちらも是非ご覧ください。

また、このアタッチメントなどを含め、乳幼児教育等が与える生涯発達の効果を測る研究として、「縦断研究」というものを紹介されていました。これは大がかりな研究ではありますが、非常に有力な研究として現在とても注目されています。内容は、特定の子ども（10 万人規模程度）を乳幼児期から大人になるまでの長期間にわたって追跡研究をしていくものです。中にはルーマニアのチャウシェスク政権下における戦争孤児を、物理的な生活環境は豊かなままにしておき、アタッチメントのみ剥奪された状態で縦断研究を行った例もあるそうです。そしてこれらの縦断研究において共通してみられたのは、心身全般に長期的なダメージ、特に自己信頼（自尊心、自制心等）、他者信頼（社会性、協調性等）、感情制御・調整といった非認知の分野の発達に深い傷が生じるケースが多く見られるという結果だそうです。

このように見てくると、乳幼児期のアタッチメントがいかに大切なのかがよくお分かりになろうかと思います。

子どもはお菓子や玩具を与えたり動画やテレビを見せるといった、モノやサービスを与えることで一時的には笑顔になり喜びます。しかしこれはその場しのぎです。なぜならそれは子どもの不安や恐怖に直接的に働きかけるものではなく「安心感を回復させるもの」ではないからです。先日お配りしました運動会のプログラムにも綴じさせていただきましたが、「見守る保育１４か条」の中に、『子どもは、何かものを与えれば喜ぶのではなく、気持ちを分かってもらうことを望んでいます。』という条文があります。この条文以外もアタッチメントについて、特に家庭の育児や子どもとのかかわりにおいて大いに参考にあるものがありますので、是非参考にしていただければと思います。

アタッチメントは、子どもが落ち着いた幸せな人生を歩んでいくうえでの、絶対的な「土台」です。高度な学校教育や社会性、粘り強く努力を重ねる力などの非認知能力も、この確かな「土台」の上に積み上げられてこそ益をなします。子ども家庭庁のホームページにあります「はじめの１００ヶ月」とはおおよそ小学１年生頃までのことを指します。つまり保育園で過ごす時期そのものです。時間は巻き戻すことはできません。今という時期を大切に、お子さんとのかかわりがより豊かなものとなることを願っております。

上に貼ってある QR コードは「子ども家庭庁　はじめの１００ヶ月ビジョン」です。分かりやすくまとまっていますので是非ご覧ください。明日 31 日は運動会です。子どもたちの成長発達を皆様と一緒に喜び合いたいと思います。